



TITLE:

雜録

AUTHOR(S):

CITATION:

雜録. 日本外科宝函 1927, 4(5): 775-776

ISSUE DATE:

1927-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200068>

RIGHT:

雜 錄

在歐鳥瀉教授より教室由茅君の許に左の如き通信あり、
同君の許しを得て同君よりの往信と一緒にこゝに掲載すること、致しました。

謹啓

母國に於てはすでに秋立ち初め候て朝夕の涼風に得も云はれぬ爽快を覺え
申候折柄

先生には異境の氣候の御障りもあらせられず愈々御清穆に被爲渉候趣慶賀
の至に不堪候

却說研究室への移轉も意外に早く去る五日を以て終了仕候て一同落付き申
候 通風 採光等誠に申分無之殊に今年の酷暑を以てしても尙涼味滴るの
感有之却て仕事の能率も低下する有様に候設備の上にて若干未完成の箇所
有之大體に於て今尙休暇氣分にのんびり致居候 中略 今年は病舍の方も
休暇中は四年學生諸君數十名來授致し賑々しく勉強罷在候 此の企は小生
共まことに結構と存じ居候外科に對する理解が一段徹底致候様にて多分來
春は新進氣鋭の士多數殺到致候こと、楽しみに存居候 其の後は 平壓開
胸患者も少く候が 先般 特發性食道弛緩症患者が七病舍に於て手術され
候 文字通骨と皮とに瘦せ細りたる此患者が平壓開胸正味三時間に亘り何
等の異變なかりしは痛快に存申候擴張食道は氣管分枝部の下方にて右胸内
に特に著明に擴がり著しき太さに達し居候ものにて噴門部に於て「Narrow-
point」を行ひ候も遂に所期の如く食餌充分に通過致さず數日の後更に胃
瘻造設を餘儀なくせしめ候 かくして術後約三週間餘にて斷次衰弱の下に
仆れ候 剖檢の結果は食道の下部にて淋巴腺腫脹(結核性)し食道は爲に壓

雜 錄

迫をうけ該腺は遂に食道内へ破開致し居りたる find を發見致し候も逃走
神經核には明らかに變性が認められし由聞及び候仍て以て特發性と云はる
ゝ義かと存候 何れにするも寡聞なる小生共には全く驚異的レコードと存
ぜられ候て一入痛快味を深く致候これにつけてももし兩側の胸腔より入り
得たらんには如何許り便宜多かりしならんかと一同咄し合候ことに御座候
先は右御機嫌御伺旁々御挨拶申上度 時節柄益々御加餐被遊候様奉希上候

八月十二日

鳥 瀉 先生

玉 案 下

由 茅 二 五 四

頓首再拜

由茅二五四殿

昭和二年八月三十一日

伯林にて 鳥

瀉

八月十二日附の御手紙本日入手、其後御健康のよし何よりの事に候、自分も
幸に健康に候故御休神被下度候、いよゝ新研究室に移轉濟のよし氣持はよ
ろしき事と存候併し請負仕事種種々不都合な點も多かるべくと考候、漸次に
改良して行くより致方無之それがまた必要に候。自分の家の様に考へる事が
必要に候 此秋か或は明春相當に巨きなツタを方々へ植ゑる様に御注意下さ
れ度候 これは磯部教授も伊藤教授も知つて居られる筈なれども忘れぬ様に
更に申候、ノールセンカヅラはだめの様に候 鬼ツタ及び冬葉の枯れぬツタ
の二種を方々へ植ゑるがよろしくと考候。小さな苗位では年數を要し候故そ
れ以外に相當大きくなつたものを要所(例へばタンク塔の直下南側壁際
の如し)に植ゑる事に候、農學部で埒明かぬ時は普通の植木屋に命じてよ

ろしかるべく候藤もよろしかるべくと考候。其後平壓開胸術の例がありし由詳細御報に接し甚だ氣持よく存候。目下の處では此様な實例は一つでも貴重に候。歐洲には何處にもかくの如き例は無し。多分米國にもなかるべく候。たとひそれが毎常試験的開胸術だけに終りてもそれでもよろしきものに候、かくの如き經驗の順序を経てこそだんく斯道が發達するものに候。一足飛びに最初から腫瘍が剔出されたり患者が治つたりせねばならぬことは無し。今の様なことをしながら茲二三年暮したからとてそれは少しも恥辱では無く候。蒸汽船でも飛行機でもそれが多少實用を爲す迄には相當の年月を経て相當の犠牲を拂つて來たものに候。何事でもみな左様のものに候故開胸術で一度も患者が治癒しなくてもそれでもよろしきものに候。従つて兩側開胸術も動物實驗の時代が今後二三十年間續きてもそれでもよろしき事に候。要點は同一の目的に向つて間斷無く努力を繼續する事にあり候。従て今度の臨床例の如きも詳細に記載して外科實國に載せる様になされ度候。京都外科の特殊の領域として五十年でも百年でも代々それを引受け引繼いで行く様でなくてはほんものは出來上らず候。氣の短かい思慮の淺い早熟な者共には五十年でも百年でもと考えて仕事を進めて居る者の腹の中などはわからぬものに候。研究室の建物だけが永久的に出來上つたところで中で働いてゐる人々の氣分がそれに一致して堅牢に出來上つて居らなければ建物に對しても恥かしい譯に候。餘程自覺してほんとうの學者の氣分が此の研究室から放射する様にならねばならぬ事に候。どうせ人の眞似をすることならば日本人の眞似をすゝよりかも西洋人の眞似を仕様とする小猿共の宮殿は日本全國には随分多かるべく候。外科研究室はその中へ加算されぬ様せねばならず候。此の研究室が l'héaunt palais des sages の嘲笑を受けるのも受けぬのも中で働く人の仕方如何にあるべく候。卒業前の學生諸子に病舎を開放して實地をやらせるの件は何人の發案かは存ぜず候が至極の思ひつきと存候。先頃大澤助教から通信有之最もよろしき企と信じ候。初心者は却て細心注意するもの故別に

患者の不幸となる事もあるまじくと考候。併し指導を直接する人々は多少骨が折れ可申候併しそれが一つの楽しみに有之べく候併し何も知らぬ者の牛耳を採つて痛快がる様な教へ方を決してせぬ様になされ度候。學生の中にでも考へる傾向のある人は醫學は何であるかその中で外科は何であるかといふ様に考へ方を進めて外科を理解する様になることと存候。教室でも大學は何であるか教授は何であるか助教、講師、助手は何であるか外科教室は何であるか研究室は何であるかといふ様に一々叩いて其の本來存在の意義を明かにしてそれで自覺を新たにする人の多くなることを希望致候。此の様な自覺を持つた人が四、五人教室に居つて同一方針で行動し教室の氣分を作り上げそれで全體を陶冶する様になれば面白いことと考候。さすれば外界から惡影響を受けるどころでなしに反對に四方を風靡して學者の面目を發揚することが出來可申候。個々の研究事項の出ることも必要なれども學者的思想及び行爲の殿堂たる可き事もまた必要に候。

自分は明年の外科學會には出席困難かと考候。學會批評の記事を受持つ人をきめて置く事など御話被下度候。下略 勿々不盡

因みに鳥瀉教授最近の御住居は次の通りであります。

R. Torikata
bei Fr. Frey
Kulmbacherstr. 4 Hpt.
Berlin-Schöneberg.